

覚え書き

有坂 広一

特攻花の謂れ

その名前を目にしたら、大抵の人が特攻隊と関連付けて捕らえるだろう。そう捕らえて、まちがいではない。

妻が何人かの人達と集合住宅の花畑の世話をしていた。親しい人が通りかかった際、その中に咲いていた大天人菊おおてんにんぎくを差し上げた。花の名前を聞いた女性は、「まあ、嬉しいわ。天にも上るような気持ち」

と茶目つ気を出して大喜びした。妻はそのエピソードを話しながら、『特攻花』という写真集を取り出した。

著者の仲田千穂は大学生の十九歳のときにその花と出会って以来、八年間にわたって撮り続けてきた。天人菊すなわち特攻花は今も喜界島という島に咲き続けている。島は九州と沖縄の中間に位置していて、特攻機出撃の中間地点になっていた。「積み荷は250キロの爆弾だけ。空へ飛び立つことは、死ぬことを意味し

ていた」と仲田は書いている。さらに、「夜明け前に出撃する若い隊員たちに、地元の娘たちは、野の花を贈った。だが隊員たちは、花も一緒に散っていくのは忍びないとの思いから、ある者は空から花を落として別れを惜しみ、ある者は何かを願うように滑走路にそつと花を置き、沖縄に向け飛び立っていった」特攻花は平和を願う花として、今も大切にされている。

私の郷里にも特攻隊に志願した青年がいる。ある日、母に別れを告げに来た。そして間もなくして今度は出征した息子の母親が泣きながら戦死を報告に来た。その家には父がいけないので、本来ならば跡継ぎとして一家の面倒を見なければならぬはずだが、にもかかわらず、何故特攻隊員になったのか。理由は分らないが、痛ましい限りだ。私は今でも特攻隊とか予科練という言葉を見聞きすると体が拒絶反応を起こす。

『特攻花』 著者 仲田千穂 二〇〇九年七月六日
ポプラ社より発行。

不要なベンチ

大江健三郎のデビュー当時、『死者の奢り』を読み、その斬新な文体に心が躍った。その時の感動は尋常ではなかった。主人公は解剖用の死体を処理するアルバイトをしている。私も世の中にそんな仕事があればやってみたいと思ったほどだ。それから大江の本を立て続けに読んだ。大江はサルトルの影響を受けているというので、私も追いかけた。哲学論の『存在と無』にも挑戦しようとしたが、冒頭の一行を目にしただけで躓いた。哲学とは無縁な自分には近づけるような代物ではないことを知った。何が書いてあるのか、まったく理解しないまま投げ出した。時代は実存主義が大流行りだった頃だ。

いつだったか、ネットか何かである写真が目にとまった。それは公園のようなどころにおんぼろのベンチが一基映っているだけだ。誰も座りそうもない代物だが妙に心をとらえられた。ベンチはひそかに己の存在を主張しているように見えた。しかし誰もその存在を認めようとはしないだろう。私はその時は何となくサルトルの本の題名が浮かんだ。そうだ、この一枚の写真こそ「存在と無」そのものではないだろうか。誰も

座らないのに俺も必需品の一つだと主張しているように見えるのだ。存在しているが無きに等しいと、なるほど、なるほど……。

あの人は今何を

石原慎太郎は八十九歳で亡くなった。病気であり、自然死に近い年齢だから、やむを得ないだろう。が、欲を言えばもつと長生きしてほしかった。石原の作品で最後に読んだのは『凶獣』という本である。平成十三年六月八日、大阪教育大学教育学部付属池田小学校に出刃包丁を持った男（宅間守被告人）が校舎に侵入し、一階にある一年生と二年生の教室に児童や教員を襲撃したことがテーマとなっていた。児童八名が死亡し、教員を含む十五名が重軽傷を負った事件である。

私がこの本を読む気になったのは、宅間守が何人かと結婚した中に有名な作家の小松左京の実妹がいたからである。この話題は古めかしくて、読者の共感を引きそうもないが、乗りかけた船である。妹さんは宅間より二十年以上で、彼の小学校時代の担任の先生であった。彼女は彼の何を見込んで結婚に踏み込んだかはわからない。一種の母性本能に駆られたのかもしれない

としか書いていない。そして異常な取り合わせとしか言いようがないとも。この結婚は四年間続いた。妹さんはこんな粗暴な男とよく持ったものだ。四年間は長いと私は思う。

石原は名の知れた作家だけあって、面白いエピソードが差しはさんである。たとえば、フランスで女性を殺して食べてしまった佐川一政の父親の話などだ。

「佐川一政の父親がとつても変だったんですよ」と石原は会話の中で呆れる。二人は一橋大学の後輩と先輩の関係である。あるとき自宅に電話がかかってくる。佐川の父親が非常に押しつけがましく、「息子が今、ものを書いているのだが売れなくて困っている。私は君の先輩なんだから、どこかに紹介してくれ」と言うのだった。その時、とつても嫌な気分がしました。この人はどこかの企業の社長をした人ですよ。その人がなんでこういうものの言い方をするのかと思つてね」

私は佐川某氏が息子の事件の後、涙を流して謝罪しているテレビを観たが、これらの話の方が面白味がある。

しかし、そもそも小松左京の妹はその後、どうしているのか、興味が戻ってきた。おそらく、凶獣との悪夢のような四年間は吹き飛ばして平和な日々を取り

戻したに違いない……。願わくはもつと彼女の詳細を知りたいが、そうはいかない。いつか分かり次第書くつもりだ。

私怨しえん

『ユリシーズ』や『ダブリンの市民』で知られているジェームス・ジョイスはどんな小さな恨みでも生涯覚えていたらしい。その一文を読んだ時、

「おッ、俺と同じ人種がいるな」

と共感した。私が同人雑誌に書いてきた他愛ない短編や小品等は大方私怨が基本になっている。それらは物語の中に奥深く入り込んでいて、誰がモデルだかは分からないだろう。高名なジョイスの場合は、当然のごとく関係者にそれが読み取られて、物議をかもしたことがあった。

ジョイスはもう一つ、心にとどまる言葉を残している。いわく、「小説とは呵責なき自己批判の書である」と。なかなかの言葉ではないか。大いに学ぶべし。私も人を恨みややすい愚かな自分を抉り出しているつもりだが、果たしてそうになっているのだろうか。

気になる人

金山洋一（仮名）さんは某会社の同僚だったが、どういうわけか好感を抱いていた。入社当時、彼の付き添いで仕事先に行った。帰りにスナックで奢ってくれた。その際、「有坂さんはこの手の店で飲みなれていくね」と好意的に言った。それから何故か時々、私を褒めてくれた。だからというわけではないが、私は不良っぽい金山さんが好きだった。と言って個人的に付き合ったわけではない。彼は私より四歳年上で三人姉妹の長女と養子結婚した。私はその会社に数年間勤め、金山さんより先に退社した。金山さんのことは思い出すことがあり、私なりに規定し、金山さんを『脱落魄望の人』と命名した。

長い年月を経て、別の親しい友人と電話をした。その際、友人が金山さんの消息を話してくれた。彼は都内で一人暮らしをしているという。以前に、突然、金山さんから電話があつて、こんなことを言ったと言っただ。

『おれんちには米粒一つとてないよ』
金を無心する電話だったらしい。

私はさほど驚かなかつた。脱落魄望の男なら、ありそうな話だと思つた。おそらく、小金持ちの妻の実家の財産を使いまくり、細君から離婚を言い渡されたのだろう。金山さんの魅力は一般社会からずれていて、自滅とぎりぎりのところで生きている……そういう危うさかもしれない。